

第4章 史跡船来山古墳群の現状と課題

第1節 保存管理

船来山古墳群の発掘調査はゴルフ場開発計画が原因であったこともあり、調査後に適切な遺構保存が行われていなかった。ただし、赤彩古墳である272号墳は移築し保存が図られている。その他の古墳は、その状態のいかんにかかわらず、埋め戻しがされていない状態である。このことは、古墳自体に悪い影響を残すことは勿論のこと、防災面からも大きな問題となる場合があるので早急な対応が必要である。

<O支群における古墳の現状>

O支群については、平成30年12月に状態調査を行い

- ① 石室の側壁や奥壁などに雨水によるひび割れが見られること
- ② 側壁などから土砂の流れが確認できること
- ③ 床は植物に覆われ確認できない状況にあること
- ④ 側壁の移動が認められるものがあること
- ⑤ 周溝や溝といった遺構が確認できること

以上のような問題点が確認できた。

<O支群における古墳の課題>

O支群が以上のような問題点を持っているのならば、他の支群の古墳はもっと状態が悪いのではないかと推測できる。また、まとまって古墳があるような場所と木々が立ち込めている場所では、側壁に苔が認められるようなこともあります、早急な保存策が必要である。

これからは定期的な管理が必要で、古墳だけでなく周辺の柿畠などの今後の利用方法などについて、十分な協議を行い、常規的な管理を模索し、さらに今後の大雪や台風といった災害からいかに船来山を守っていくかを考えなくてはならない。

段階的に墳丘の崩壊・石室の構造・風化・消失・破壊・変位などの調査を行い、風化・劣化防止策の調査による対策を練ることが緊急の課題である。石材の強度も含め、その成果によりどのような対応が必要か検討することも重要である。

整備前の保存措置も必要であり、保存状況により埋戻し・石材強化・一部補修など方針を決めて、遺構の保存に対応する必要がある。現状の不安定な遺構を保存するための緊急対応が一番必要である。

石室カルテの作成

令和元年度事業として史跡船来山古墳群の現況を把握することを目的として、O支群の38基について「石室カルテ」の作成を行った。調査項目は下記のとおりである。また「石室カルテ」の一例として主なものを次にあげておく（19号墳、58号墳）。

<石室カルテの調査項目>

石室カルテの作成にあたっては、原則目視により石室の状態を確認し状況を把握した。記録する調査

項目は下記のことを標準とし、詳細は協議し決定した。

- ① 墳丘及び石室の規模：大きさを計測、現況写真による記録。
- ② 石室の様式：石室の形式（竪穴系横口式石室、横穴式石室〔両袖式、片袖式、無袖式〕）、石材加工（野面石、割石、切石等）、石積み工法（布積み、乱積み、谷積み）、使用石材（硬質砂岩ほか）、彩色（赤彩ほか）等。
- ③ 破損状況：欠損、ずれ、孕み、割れ、剥離、陥没、崩落、間詰め石の抜け等。
- ④ 破損要因：構造的要因、樹木による影響、天候・自然現象による影響、その他要因、人為的改変。
- ⑤ 危険度判定：危険度の判定は、石室そのものが崩落する危険性と、見学者等の通行等における危険性を考慮し、総合的に判断を行う。ずれ、孕み、抜け等の度合いを目視により調査し、その結果に基づき崩落の危険性を区分する。
- ⑥ 上記調査項目を石室一基ごとにカード形式でカルテを作成する。

史跡 船来山古墳群 石室カルテの一例

(Ver.3.1)

古墳名	19号墳		枝群	O枝群	地区	H 6 区		時期	後期					
墳形	円墳	○	方墳	-	前方後円墳	-	前方後方墳	-						
	その他 径12~13m、周溝幅2~3m													
	ガラス小玉、銀製耳鑽、雁木玉、銀刀装具、銀製空玉、金銅製空玉、馬具、農工具、須恵器大甕（周溝）													
石室の形式	竪穴系横口式		-	(備考欄)										
	横穴式	無袖型	○	片袖型	-	両袖型	-	疑似両袖型	-					
	その他													
石室の開口方位	南南西	石材加工	自然石	石質	硬質砂岩		石材の劣化状況		劣化（弱）					
※ 現況値については、石室に変状が見られる場合に記載 ※ ★は残存値														
法量	(単位：m)		(報告書値)	(現況値)		(報告書値)	(現況値)		(報告書値)	(現況値)				
	掘方	長	★7.40		幅	4.00		高	1.60					
	石室		全長	6.30	玄室長	5.30		玄室幅	1.70					
	玄室高		★1.70		玄門幅	1.15		玄門高	★1.15					
	羨道長		1.00		羨門幅	-		前庭部長	-					
	主軸方向		N-18° -E											
その他 堀方長、玄室高、玄門高は残存値。														
構造	閉塞石	-	前庭	-	羨道	(不明)	立柱石	○	樋石	-	鏡石	○		
	腰石	-	玄室の前後室分け			-	追葬	○						
	棺台施設	○	(備考欄) 扁平な砂岩角礫敷 (160cm × 70cm)											
	彩色	○	(備考欄) 石室内部全面にベンガラ塗布。											
	その他特徴		若干の胴張りで、非常に細長いプラン。羨道部は破壊により不明。奥壁を岩塊を利用（鏡石）。											
石室の状況	良好	○	ハラミ	-	ズレ	-	抜け	-	欠損	○	割れ	○		
	表面の浮き	○	倒れ込み	-	全壊	-	部分崩壊	○	その他	天井石等欠損				
特記事項														
<p>◆ 墳丘全体は芝・笹等の草に覆われ、おおむね良好に保存されている。石室の石材は一部に割れやカケが見られ、状態の悪いものもある。中でも図に示した二石については、表面の割れから雨水等が流入し、気温の低下による凍結で膨張して割れる、また凍結融解を繰り返すことで剥離が生じている。</p> <p>◆ 床にある図面にない石については、左側壁からの落石と考えられる。</p>														
危険度	A	-	B1	-	B2	-	B3	○	C	-	D	-		

【写真】 ※ 全体がわかる写真と特徴を示す写真



石材の劣化状況

【写真】 ※ 全体がわかる写真と特徴を示す写真



赤彩部分が劣化により剥離している。

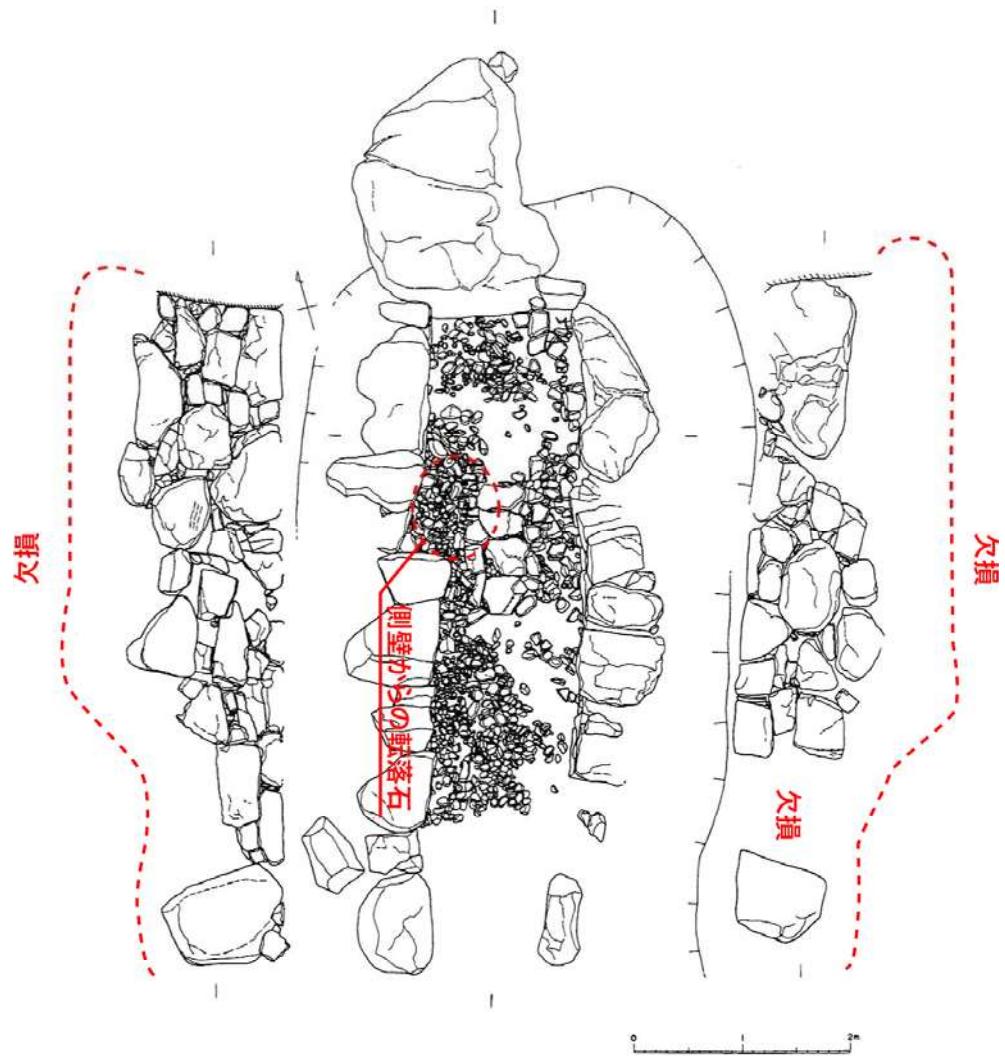


赤彩の残存状況



側壁からの転落石

【図面】 ※ 各図に石室の状況を記入



史跡 船来山古墳群 石室カルテの一例

(Ver.3.1)

古墳名	58号墳		枝群	O枝群	地区	M~Oの8~10列7~8区		時期	後期～終末期					
墳形	円墳	○	方墳	-	前方後円墳	-	前方後方墳	-						
	その他 後期古墳最大の円墳。径16~17m。周溝あり。													
主な出土遺物	水晶切子玉、ガラス玉、鉄刀子、鉄刀、須恵器（無蓋高杯、長頸瓶片ほか）、耳環、須恵器細頸壺（周溝）													
石室の形式	豎穴系横口式		-	(備考欄)										
	横穴式	無袖型	-	片袖型	-	両袖型	○	疑似両袖型	-					
	その他 胴張りを呈した細長いプラン。													
石室の開口方位	南	石材加工	自然石	石質	硬質砂岩		石材の劣化状況		劣化（弱）					
※ 現況値については、石室に変状が見られる場合に記載 ※ ★は残存値														
法量	(単位：m)		(報告書値)	(現況値)		(報告書値)	(現況値)		(報告書値)	(現況値)				
	掘方	長	7.30		幅	-		高	2.00					
	石室	全長	10.50		玄室長	5.00		玄室幅	1.80					
		玄室高	★2.70		玄門幅	1.20		玄門高	★1.90					
		羨道長	5.60		羨門幅	★1.50		前庭部長	-					
	主軸方向		N-9° -E											
その他														
構造	閉塞石	-	前庭	-	羨道	○	立柱石	○	樋石	○	鏡石	○		
	腰石	-	玄室の前後室分け			-	追葬	-						
	棺台施設	○	(備考欄) 棺台の残欠である砂岩角礫が遺存し、1.0×2.0m程度のプラン。											
	彩色	-	(備考欄)											
	その他特徴													
石室の状況	良好	○	ハラミ	-	ズレ	-	抜け	-	欠損	○	割れ	○		
	表面の浮き	○	倒れ込み	-	全壊	-	部分崩壊	○	その他	天井石等欠損				
特記事項	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 石室の残存状況は良好。 ◆ 凍害及びスレーキングによる石材の劣化が進行している。 													
危険度	A	-	B1	-	B2	-	B3	○	C	-	D	-		

【写真】

※ 全体がわかる写真と特徴を示す写真



・現況全景

・右手前の石材の劣化は調査時より進行している。

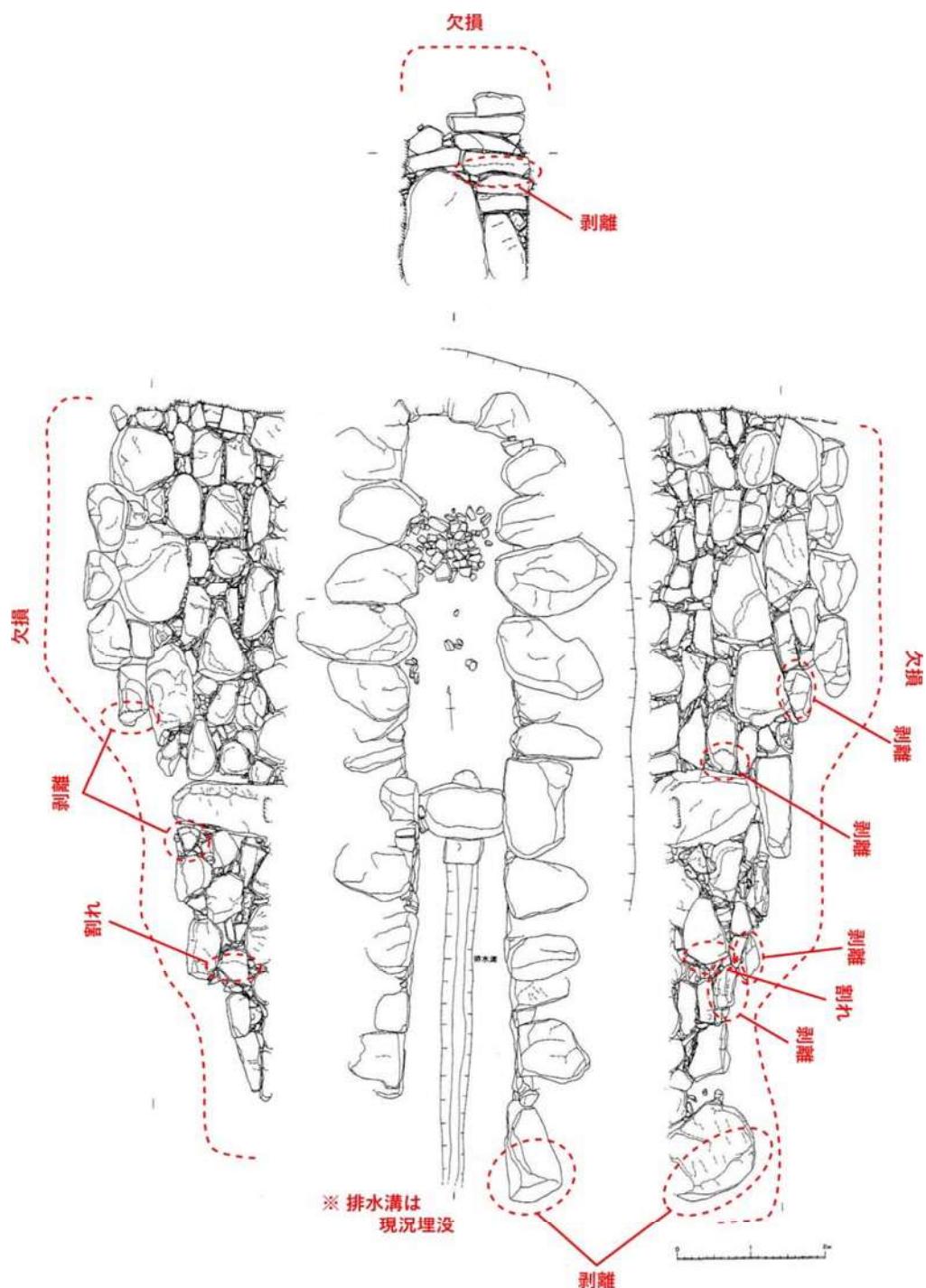


・調査時全景



・表面剥離状況

【図面】 ※ 各図に石室の状況を記入



石室石材の風化劣化状況について

船来山古墳群の石室石材については、長年放置された状態であったことより風化劣化が著しい。そのため、今後の保存管理と整備に向けてその状態と対応についてご教示いただくため、奈良文化財研究所保存修復学研究室の脇谷草一郎氏による視察を依頼し、令和2年6月30日に下記のとおりご指導いただいた。この内容をもとに調査・試験を進め適切な保存管理及び整備活用を行っていくこととする。

【船来山古墳群視察レポート】

平成6年から9年にかけて発掘調査が実施された船来山古墳群では、その後20余年間、石室が露天に曝された状態にあり、一部の石室石材にはすでに表面の剥離などの劣化が発生した様子が認められている。今回の視察では、石室石材の特徴とそれら石材に生じている劣化のパターン、および周辺の環境条件を視察することで、どのような石材に対して、どのような劣化が発生しており、また、それらの進行を助長する、あるいは抑制する周辺環境条件について予備的な検討をおこなった。また、本巣市では現在史跡整備を進めており、令和4年に基本計画、翌年には実施計画を策定することとしており、令和2年度および3年度に実施すべき検討課題について協議した。

1. 石室の構造、安定性について

今回視察した石室はすべて天井石が取り外された状態のものであった。側壁は天井石の上載荷重があるて初めて安定化する（側壁間の摩擦係数が増加する）ため、特に腰高以上の側壁が残存する石室では構造的に不安定になっていると考えられる。側壁の一部では孕みだしが認められる箇所もあり、その要因には背面の土圧が大きく影響を及ぼしていると推察される。これら石室の構造的な安定性については土木の専門家から助言を求めたい。側壁背面の土圧に対して、特に、降雨時の土壤水分量が大きく影響しているのであれば、背面土中において水分量測定を実施する。整備工事に合わせて排水工事を行い、工事による水分量変化など工事の効果を検証するためにも、代表的な石室1、2基を対象として一定期間土壤水分量のモニタリングを実施しても良いと考える。

2. 石室石材の種類と劣化特性について

今回の視察時は天候の影響もあり、岩石の観察が十分には実施できなかつたが、巨視的観察から石材は大まかに3ないし4種に分類されると考えられる。それらの劣化の特性を記す。

- ① 褐色の砂岩：褐色を呈するやや粗粒の砂岩で、58号墳と19号墳で多用されている石材。褐色を呈する原因として、砂岩に含まれる鉄が既に溶けだして酸化鉄として沈着していることによる色調と考えられ、石材として既に（露頭にある時点で）劣化が進行しているものと考えられる。表面に付着した水は比較的容易に石材へと浸透することから、空隙径および空隙量ともに比較的大きな砂岩と推察される。また、厚さ数センチのユニットで層理が発達しており、たとえば58号墳羨道部手前右の石材のように表層が失われている石材でも、その表面に酸化鉄の沈殿が認められることから、現在剥離には至っていないクラックの内部にも既に液状の水が浸透していると考えられる（図50）。石室を構成する際には、奥壁や一部の側壁などの比較的大きな平面を鉛直方向に据えている石材の場合は、砂岩の層理面を鉛直方向としているため、層理面に沿った鉛直方向

の浮き、クラックが発達している（図 51）。これらの石材に対して打診棒による触診を行ったところ、58号墳の奥壁をはじめ、表面からはクラックが目視できない箇所であっても既に浮きが検出された。一般に砂岩などの堆積岩には粘土鉱物が量の多寡はあるものの含有されており、それの中には水分を含むと体積膨張を引き起こすことが知られている。このような堆積岩は表面から水が浸透すると、表層のみが膨潤する一方で、奥側が膨潤しない（水の浸透が緩慢なため）ことから、クラックが拡大し、やがて表層の剥離へと進展することが既往研究で報告されている。したがって、この砂岩に対しては、乾燥と湿潤状態を繰り返す、いわゆる乾湿繰り返し風化の進行が懸念される。また、先述の通り、比較的容易に石材内部に水分が浸透することから、天空に対して開けた場所にある石材については、冬期に凍結破碎が進行する可能性が懸念される。



図 50 層理が発達した砂岩(58号墳)



図 51 層理面が平行に発達した浮き(58号墳)

- ② 灰色の砂岩（粗粒）：19号墳の一部に使用されている。比較的粗粒の鉱物粒子ないし岩片から構成されており灰色を呈する。褐色を呈する砂岩同様に吸水性が高いように見受けられ、表面に蘇苔類が繁茂している様子も観察された。また、石材表面が荒れている様子も見られ、表面から粉状化するパターンの劣化が進行する石材と推察される。褐色の砂岩同様に、乾湿を繰り返すことによる鉱物粒子間の膠着力の低下による粉状化、あるいは高含水状態になり得ること、適度に透水性状が高いと推察されることから、天空に対して開けた場所にある場合、冬期の凍結破碎による劣化が懸念される。
- ③ 灰色の砂岩（細粒）：19号墳の一部、146号墳に見られる砂岩で、比較的細粒の鉱物粒子および黒色を呈する長さ 1-2mm の短冊状鉱物粒子を含む（図 52、図 53）。通常堆積岩では淘汰された（粒径が揃った）粒子で構成されるが、後者の黒色粒子は自形とも見える形を有しているもののが存在することから、上記 2 種の砂岩とは異なる岩石と推察される（何らかの変成岩か？要検討）。表面に蘇苔類などが繁茂していないことからも空隙径、空隙量ともに小さく、緻密な構造を有すると推察され、したがって上記 2 種の砂岩と比較して堅牢で、146号墳に見られる石材では破面が鋭利に残存し、劣化の進行に対する耐性が現場で見られた石材の中で最も高いものと考えられる。



図 52 灰色を呈する硬質な砂岩(146 号墳)



図 53 灰色を呈する硬質な砂岩(拡大)

- ④ 灰色の砂岩（細粒）：③の石材と同様に細粒の鉱物粒子から構成されるが、③に見られた黒色を呈する短冊状の鉱物が見られない、あるいは非常に少ない石材も少数ながら見られた。しかし、石材表面はラン藻類などに覆われており、その断面観察は極めて限定的であることから、③と同種の石材である可能性も十分に考えられる。

3. 劣化のパターンと周辺環境の関係について

① 凍結破碎について

凍結破碎は冬期に空気中の水蒸気量が減少することで、氷点下数十度の天空と材料（この場合は石材）表面との間の温度差によって、熱が赤外線として移動し、材料表面温度が大幅に低下することで生じる。また、材料中の水分量が低下すると、材料に含まれる水の凝固点は低下することから、凍結破碎を防止するためには、(1)材料中の水分量を低減すること、(2)材料表面を露天に曝すではなく屋根などで覆うこと、が肝要となる。石室石材について検討すると、146号墳のように、疎林内部に位置する石材の場合は、竹を中心に適度に除伐するものの、ある程度石材を覆う植生を残すことで、その危険性を低減し得ると考えられる。また、58号墳で計画されている墳丘の復元は、放射冷却を抑制するものとなるので、整備による復元盛土によって石室内部の石材は凍結破碎の危険性を回避し得る。一方、19号墳のように露天に曝されている石材の場合、水の供給源をもたない、すなわち石材が地盤と接していない場合は雨水対策として撥水処理を施すことなどが考えられるものの、ここでは石材背面が地盤と接していることから、内壁表面のみの撥水処理はむしろ不適切な処理となり、含水率の低減策は難しいかと思われる。したがって、墳丘の復元を伴わない整備をするのであれば、たとえば少なくとも厳寒期のみ石室全体に対して何らかの覆いを施すなど、季節ごとに異なる公開手法を講じる必要があると考える。

② 乾湿繰り返し風化について

先述のとおり、乾燥過程あるいは湿潤過程において、石材表層と深部で含水状態に大きなギャップが生じた場合、含水率変化にともなう石材の体積変化に起因する大きな応力が表層付近で発生し、物理的な破壊を引き起こす。一般に石材の圧縮強度は大きいものの、引張強度はその1割未満に過

ぎないことが知られている。したがって、特に石材内部が湿潤状態にあるときに、その表面が急激に乾燥した場合、石材表層には引張応力が発生するため、その反対の含水状態変化の場合と比較して、石材は容易に破壊に至る。また、石造文化財に対して基質強化処理がしばしば実施されるが、処理によって得られる引張強度は、このような際に発生する応力に対して決して十分なものとは言えない。したがって、乾湿繰り返し風化抑制のためには、急激な水分状態の変化を引き起こさない環境づくり、特に、先述のとおり地盤を介した石材への水分供給が断てない本遺跡においては、急激な水分蒸発を引き起こす環境を改善することが肝要と言える。

水分状態の減少を引き起こす因子としては、直達光の照射と冬期の乾燥した空気による水分蒸発が挙げられる。とりわけ前者については、夏期の一時的な降雨後の日差しが想定され、その負荷を軽減するためにはやはり覆屋や復元した墳丘などの施設か、あるいは疎林内部といった適度な植生に覆われた立地条件が求められる。したがって、乾湿繰り返し風化と凍結破碎の両者を抑制するためには、墳丘の復元を含む何らかの覆屋施設を設置することが望ましいと考える。また、復元した墳丘を設置した場合でも、外気との換気が生じた場合、冬期の外気は石室石材の乾燥を引き起こす。乾湿繰り返しの危険性を一層低減するために、墳丘を復元した場合であっても冬期の換気を抑制する手法を検討すべきと考える。

③ 塩類風化について

塩類風化については、今回の視察時では顕著には見られず、また、塩類風化に起因すると想起される劣化状態も見られなかつたため、これらの危険性は低いと考えられる。しかし、多くの塩の場合、その析出は気温と湿度が低下する冬期に盛んとなることから、次回以降、冬期に視察を行い、それらの有無についても併せて確認したい。凝灰岩など火山性の石材の場合、石材自体が多量の硫黄を含有していることがあり、これが酸化されることで硫酸となり、硫酸塩を生じる場合などがある。また、海成の堆積物の場合には塩化ナトリウムや硫酸マグネシウムなども析出し得ることから、少量析出することも想定される。また、これまで雨水によって溶脱していたため確認されなかつた塩が、墳丘を復元することで析出し得る環境へと変化する可能性は否定できない。

以上、石材の種類別（大きく2つに分類）の劣化特性と環境条件の組み合わせから、活用の可能性について大まかな傾向を示す。ただし、あくまで今回の視察からの大まかな推定であり、今後さらなる調査、観察を実施すべきものと考える。

石 材	環境条件	保存の可否
軟質砂岩 (褐色・灰色粗粒)	墳丘の復元・覆屋施設	良(注1)
	露天（覆屋施設なし）	かなり厳しい
硬質の灰色石材 (灰色細粒)	墳丘の復元・覆屋施設	良(注1)
	露天（覆屋施設なし）	可能性あり(注2)

注1：決して万全という意味ではない。乾燥抑制という点において、冬期の換気を抑制する方策を講じることが望ましい。

注2：石材が強固であるため、環境条件が厳しくとも公開できる可能性がある。しかし、劣化の有無を定期的にモニタリングすること、そして劣化の発生が認められた場合にどのように対処するのか（たとえば早急に埋め戻しをする）など、あらかじめ想定しておくべきと考える。

4. 基本設計までに検討すべき項目案

① 石材の劣化特性に関する試験

- ・薄片試料作製：石材中に含まれる鉱物種などを見る。また、層理面に沿った微小なクラックの状況を確認する。（石材種類ごと）
- ・細孔径分布測定：石材中の空隙径と各空隙径の存在量を測定する。水の浸透しやすさ、したがって乾湿繰り返し劣化や凍結破碎のリスク評価の指標となり得る。ただし、試験には1cm程度の試験片が必要となり、水銀を注入するため破壊試験となる。試験体提供の可否が課題である。
- ・強度試験：どれほどの応力が発生した場合に破壊に至るのか見積もる。可能であれば円柱試料（φ3～5cm×1.5～2.5cm）を作成し、破壊試験を行い、引張強度を実測する。しかし、試験体提供が難しい場合、針貫入試験（石材に針を刺して、その反発強度から一軸圧縮強度を推定するもの）を実施、圧縮強度と引張強度のきわめて大まかな比から、圧縮強度を推定する。（かなり確度は悪い）
- ・吸水膨張試験：乾湿繰り返し風化を検討するため、石材表層と内部で含水率の極端なギャップがあった場合、どれほどの応力が最大発生し得るのかを検討することができる。
- ・クラックの分布調査：打診棒を用いて、表面からは目視で確認できないクラック（潜在的リスクの評価、劣化進行の有無についてモニタリング箇所の候補）の有無について確認する。

② 環境条件に関する実測調査

- ・気象観測（岐阜市の管区気象台データを援用可能か検討、降水量などが異なるようであれば現地実測が望ましい）
- ・石室近傍での土壤含水率測定：孕みだしへの影響検討（土木の先生に要確認）、石室石材への背面からの水分供給量に関する推定。

第2節 活用

活用を考える場合に重要な視点の一つに、ガイダンス施設としての「古墳と柿の館」があげられる。展示品や展示の状況は大変高度で分かりやすくて良いが、「富有柿の里」駐車場から遠い位置に建てられており、国道からも遠いため、活用しづらいのは否めない。そのため、「古墳と柿の館」と整備された箇所を効果的に関係づける工夫が必要となる。ガイダンス施設で学んだことが現地の様子と直感的にリンクし、体験的に理解できるように展示内容や方法をリニューアルするとともに、それに対応した現地の整備を行う必要がある。

しかし、「古墳と柿の館」のある「富有柿の里」は、富有柿の振興複合施設として建設された経緯があり、他部局所管の施設であるため、施設の老朽化による修繕をはじめ、改修などに時間要する現状である。今後はガイダンス施設として活用し、より機能を充実させるための、施設の委譲を含めた調整をする必要がある。

また学校教育では、小学校の現行学習指導要領の「社会」の指導計画作成において、「博物館や資料館などの施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などについての調査活動を取り入れるようにすること」を配慮するよう求めており、船来山古墳群や地域の文化財を積極的に学習に活かすなど学校現場との連携を図る。学習指導要領では、「深い学び」の重要性が提唱され、アクティブラーニングが取り入れられている。現在、岐阜大学教育学部と協力して、小学6年生の社会科の授業にかかる教育プログラムを作って実践している。日本の歴史をより身近に感じて深い学びができるよう、ワークシートやスケルトン教材を活用し、古墳群現地の見学も行っている。今後も連携を深め、歴史ロマンを追及する教育プログラムや、総合学習での構築等を行っていきたい。

社会教育の面からは、市民参加による文化財の保存・活用を進めることが重要となる。市民との協働による活用策の作成や整備事業の一部を市民とともに実施するなど、地域のアイデンティティーを醸成する観点からも市民参加による活動を充実させる。児童生徒だけでなく、大人にとっても生涯教育の場として、船来山古墳群で自主的に楽しい学びができるよう、検討していく必要がある。

また、船来山への市民のアプローチは歴史文化の面だけではなく、健康づくりの面においても活用できるよう整備の在り方を検討する。船来山は比較的標高が低く、尾根上の眺望も優れており、市民の憩いの場としては最適である。庁内の健康福祉部とも連携しながら、健康づくりの場として活用を図る必要がある。

以上の視点から活用の方向・方針を決めていく。

第3節 整備

整備の基本は安全・安心である。いくら立派でも石室の側壁が見学中に倒壊するようなことはあってはならない。そこで多くの自治体では石室の石を偽石で造るなどの工法により、安全に遺構を保存する等、本物を出さないという手法で遺構を保存している。今後も、土木の専門家や災害対策の専門家等の指導を受けながら、安全に見学できる保存整備方法を考える必要がある。ただし、船来山古墳群の本質的価値に影響を及ぼすことは本末転倒であるため、本質的価値を守りながら、いかに安全対策をとるかが課題である。

さらに江戸時代の名古屋城石垣普請による石取りによって、多くの古墳の天井石が抜き取られており、不安定な状態で現在まで保存された経緯がある。400年以上天井石がない状態で土中にあり、約30年前にゴルフ場開発にかかる発掘調査によって露出した石室について、どのように保存していくか、また天井石をどのように修復、復元するかも課題である。

また、船来山の古墳の特徴として急峻な場所にも古墳が造られており、こうしたところをどのように整備すべきかが課題である。過去には自然災害による大規模な土砂災害が発生した経緯もあるため、特に山麓部を中心とした災害の予防措置を含め、山麓から古墳群現地を見学する遊歩道の安全対策を十分に検討する必要がある。

最大の問題点は、290基ある古墳を「どこまで」「何年かけて」修復・復元するのかということである。発掘調査の結果露出した石室は、調査当時に埋め戻しができず、約30年が経過し、劣化が進んでいる。これらの石室の修復・復元には、多額の費用を要する。そのため、財政面とのバランスをとりながら、長期的視野で計画的に進める必要がある。この重要課題をクリアしてから具体的な課題に取り組むべき

と考える。

また、古墳ばかりでなく、周辺環境も整備しなくてならない。特に植生は、景観上も大変重要な問題である。特に、遊歩道などの整備では、どのような樹木でどこまで隠すか、あるいはその樹木が古墳とどのような関係にあるのかを考えながら植生の復元を行う必要がある。古墳の中や上に生えてしまった樹木は、古墳の保存のために除伐しなければならないが、船来山の里山としての特徴になるような樹木については、古墳のない場所に移植するなどして、里山としての整備をすることも必要である。

整備を具体的に進めるにあたり、価値ある資源としての分かりやすさや、心地よい環境を演出するような整備を目標とする。船来山古墳群のキャッチコピーである「古代と未来のかけ橋 船来山古墳群」が体感できるような整備を進める必要がある。

第4節 運営・体制

これまでも、検討委員会をはじめ「本巣市こども学芸員」や「船来山古墳群ボランティア」の存在により、市民参画を図ってきた。また、専門家による船来山古墳群の研究もすすんでおり、いろいろな人々の参画も進んでいる。今後もこのように市民参画を進めながら、庁内の連携強化と専門職員の配置を進め、行政・専門家・市民による調査研究・保全活用・維持管理ができる体制をとる。また、市民をはじめ各主体のお互いの得意分野が発揮できるように役割分担を明確にするとともに、情報共有しながら、充実した維持管理・運営をめざす。